公開講演会記録

近現代に続く「和魂漢才」の効力

―嘉納治五郎と松本亀次郎、そして周恩来との出会い

周恩来平和研究所所長　王敏

はじめに

異文化を学ぶむずかしさは学ぶ姿勢にもある。中国文明に学んだ日本は「和魂漢才」を学習理念とした。近現代に入っても異文化に接する日本文化の理念になっている。その真髄とはどういうものか、近現代の日中の3人の歩みの略図を考察したい。また、小文で取り上げる3人の出会いの接点は、共有する「漢才」によるものである。教育の舞台を介して、立場の異なる3人が相互浸透から昇華に至らせたのだ。

近代中国に留学生派遣を促した戦争

隋・唐時代、日本は留学僧や留学生を中国に20回以上派遣し、中日交流史上初の学問への探求の道を開いた。それから千年後、留学の目的地は逆に明治維新後の日本に移った。

アヘン戦争（1840～42年）が眠れる中国を目覚めさせ、中国は西洋の発展に注目し始めた。中国は1872年、ついに最初の官費留学生30人を米国に派遣した。

日清戦争（1894～95年）の敗戦により、中国は近代化の発展において、日本に学ぶ価値があることを認識し、しかも両国は文化や習慣、文字が似ているため、欧米に行くよりも近くの日本へ留学した方が良いと考えた。こうして終戦の翌年（1896年）、中国はすぐにこの考えを行動に移し、留学生13人を日本に派遣し、発展の経験を求めた。これによって、中国青年の日本留学の幕が開かれた。日露戦争（1904～05年）で日本が勝利したことは、さらに中国の奮起を促し、当時東京に集まった中国人留学生は1万人を超えるまでになった。

留学生教育の開拓者・嘉納治五郎

中国の駐日公使を務めていた裕庚は1896年、日本の外務大臣・西園寺公望と交渉し、日本が中国の公費留学生を受け入れることを求めた。西園寺の友人で、当時の東京高等師範学校の校長を務めていた嘉納治五郎（1860～1938年）が、この要請を積極的に支持した。

嘉納は、オリンピック委員会委員（1908年）を務めた最初のアジア人ではあるが、1893年に日本初の公立教育機関である東京高等師範学校の校長を務めた教育者でもある。同学校では約25年間在任した。

嘉納は子どもの頃から四書五経を読み、18歳のときに漢学塾・二松學舎（現在の二松學舎大学）に入学し、その後、東京大学文学部に編入学した。妻・須磨子の父は、かつて森有礼公使に随行し、清国を訪問した漢学者の竹添進一郎だ。竹添は『桟雲峡雨日記』を書き、駐天津領事などを務めた。嘉納の周りは漢学の雰囲気に満ちていたと言える。

儒学と漢学は嘉納の人格形成に骨組みされたと言われる。論語の「仁義礼智信」の素地に、17世紀のイギリスの思想家ジョン・ロック（1632～1704年）とドイツの教育者ヨハン・ベルンハルト・バゼドウ（1724～1790年）の考え方を組み立て、「知性、美徳、身体」の3つの教育理念を提唱した。

当時、洋学が盛んになる社会的な雰囲気の中で、嘉納が儒教を核とした漢学の価値を唱え、東京高等師範学校の校長の傍ら、中国人留学生を対象にする宏文学院の校長をも兼ねることにした。彼のもとで、日本で進学を目指したのは8000人の中国人学生という。その中に、陳独秀、楊昌済、魯迅、黄興、楊度、秋瑾、田漢ら、後の中国史における多くの偉人が在学した。

他方、嘉納は、漢学を国学と並行して行う科目の確立を目指して国漢科を設立して、1895年に東京高等師範学校で開講した。続いて宏文学院の松本亀次郎教授に中国語訳付きの日本語教科書の編集を依頼した。教材の特徴は両国で一般的に使用されている漢字を媒介に日本語を学ばせるところにあり、いわば漢訳和語教授法といえよう。

1902年7月、清末の政治家・洋務派大臣の張之洞の招きで、嘉納は中国に2か月間滞在し、教育視察を行った。『嘉納治五郎大系』（本の友社、1988年）の第9巻には、彼の「清国巡遊所感」が収録されているが、その文章において、彼は帰国した留学生の憂国の思いと現実の制約との矛盾を記し、それをひどく悲しんでいた。また、嘉納は真心を込めて次のように示した。中国自身の発展の特徴に基づいて、改革のペースは急いではならず、平和的かつ緩やかに進んでいく方がいいだろう。教育の分野では、一般教育や産業教育の発展を推進することが当面の急務だ――今でも嘉納の意図や見解は大きな啓発を与えている。

日本で最初に中国人留学生を受け入れる学校・宏文学院

1896年6月9日、『朝日新聞』は清朝の「国費留学生」来日のニュースを報導した。報導によると、蘇州と

寧波から選ばれた13人の留学生を、東京高等師範学校校長の嘉納治五郎は神田区三崎町（現千代田区）の民家に住まわせ、東京高等師範学校の教室を指導に使うように手配したとある。

１８９９年、嘉納は留学生の宿舎に「亦楽書院」という看板を掲げた。言うまでもなく、「亦楽」とは『論語』にある名句「有朋自遠方来、不亦楽乎（朋有り遠方より来る、亦た楽しからずや）」からとったものだ。その後、いっそう多くの中国人留学生が訪ねてきた。嘉納も正式な教育機関にするためのさまざまな準備を徐々に進めていった。当時の外務大臣・小村寿太郎の指示で、１９０２年に正式な教育機関への改組申請が認められ、「弘文学院」と改名された。その後、同校は後の文豪・魯迅、辛亥革命の際に活躍した黄興や宋教仁、中国共産党創設者の一人である陳独秀ら早期の中国人留学生を迎えた。

牛込区西五軒町に移転した弘文学院の校舎は整備され、ますます人々が重視する中国人留学生育成の拠点となった。１９０６年時点で、在校生数は１６１５人に達し、日本最大の中国人留学生のための教育機関となっていた。なお名称は、清の乾隆帝の諱である「弘暦」の「弘」を避けて、「宏文学院」と改められた。教育の形式も中国の需要に対応し、「速成科」に力を入れ、専攻も当時の中国の発展に最も役立つ師範科を中心とした。

１９０５年７月３日、清政府は帰国留学生の最初の試験でもある御前試験を行った。病気で中退した学生を除いて、日本に留学している13人の学生のうち、７人は進士の称号を授与され、11人は官職を授かった。これについても『朝日新聞』は７月17日、７月20日、１９０６年６月15日と、数回報道し、中国人留学生へ注目の波を引き起こした。

その後日本で、私費留学生を受け入れる私立学校がぼつぼつ成立したが、宏文学院を含む留学生の間で反政府の言動が現れ続け、社会的に批判されることが相次いだ。そこで、日本政府は清政府と協力して、１９０５年11月２日に革命活動への参加を制限する「留学生規則」を公布したが、それに対して、留学生の集団帰国や陳天華の自殺など、抗議が引き起こされる引き金となってしまった。

さらに、清政府によって、公式の学生を派遣する初期段階で実施された「促成教育」方法も調整する必要があると見直される。促成教育以上の教育効果を得るためには、正規教育の正当性が裏付けが必要とされるのである。

「速成科」の修業年限は３か月から１年半まで多様で、各学科の授業は通訳付きで行われた。後に、「速成科」の弊害に気付いた清政府は、日本の文部省と共同して調整し、「五校特約」を締結した。こうして、１９０８年からの15年の間に、１６５人の留学生が５校に派遣された。この５校とは、第一高等学校、東京高等師範学校、東京高等工業学校、山口高等商業学校、千葉医学専門学校を指す。清政府は学生１人につき毎年２００～２５０円の学費を支払った。

その影響で、宏文学院は時代の発展に順応し、１９０９年に閉校した。７年間という短い期間だったが、その歴史的な使命を果たし、中日が共有する教育史における懸け橋となった。７年

宏文学院の跡地は現在住友不動産飯田橋ビル３号館のエリアにあたる

間に、同校は留学生７１９２人を受け入れ、そのうち３８１０人が卒業し、中国の発展の中核を担う人材となった。その後、関東大震災により、宏文学院は燃やされてしまった。今や、その遺跡を知る人はほとんどいなくなった。

２００７年、当時の温家宝国務院総理が訪日した際に日本の国会で演説を行い、宏文学院で学んだことのある魯迅らについて言及した。

占春園と東京高等師範学校

遣唐使の派遣が日本文明の進歩を大きく促進したように、近代に日本に留学した中国人学生も、近代中国の後進を変える上でかけがえのない役割を果たした。現在、東京都文京区の旧東京高等師範学校の跡地には、中国と日本が共同で培った教育成果を守るかのように、嘉納治五郎の銅像が立っており、日中共同で経験してきた近代教育の役割を再考することを呼び掛けている。

東京都文京区大塚にある占春園は、１６５９年に徳川光圀の異母兄弟である松平頼元によって建てられた。当時は青山の池田家住宅、溜池の黒田家住宅とともに江戸三苑庭園と呼ばれた。１９０３年、東京高等師範学校が湯島から移転し、占春園は学校の一部となった。

東京高等師範学校は１８８６年に設立され、その前身は東京師範学校で、現代日本で最初に小学校教師を養成した学校であった。１８７２年に、アメリカ人のスコットを教員として雇い、教授法とアメリカの小学校教科書を中心に、アメリカの師範学校の教育経験、教材指導、新しい教授法の実施を教わった。１８７３年６月、教員養成課程の教育実習の場として附属小学校が設立された。１８７５年、中学校の教師を育成する教員養成部門が追加された。１８７２年には編輯局を設置し、全国の小学校向けの新型教科書の作成、小学校教育計画の策定、近代教育の普及に努めている。

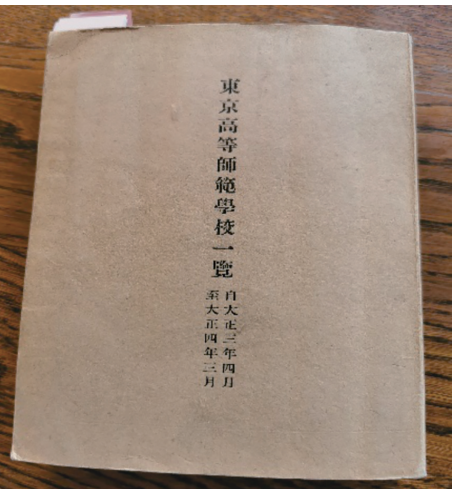
日本の近代初等教育の振興が成功したことに伴い、１８８６年に高等師範学校と改称され、日本で最初の師範学校とあげられる。その後、中等教育の着実な発展に伴い、学校は再び新しい仕事を引き受け、１９２９年に東京文理科大学に編入され、１９４９年からは東京教育大学を経て、１９７３年に筑波大学教育学部となった。

アジアでも初期の頃から近代教育が行われたこの学校には、中国は清王朝後期から多くのエリートを送りこんだ。当時、近代啓蒙教育は国を治めるための必須だったため、多くの有名人が東京高等師範学校で学んだ。たとえば建国の国家主席毛沢東の妻である楊開慧の父・楊昌済は、宏文学院から東京高等師範学校に進学したのである。中国共産党第１回大会の代表である李達、中国対外友好協会の会長を務めた張香山、そして北京高等師範学校と武昌高

等師範学校の創設期の多くの教師とスタッフは東京高等師範学校を卒業した。

周恩来の入学志望校と松本亀次郎の日本語教材

1917年秋、後に新中国の初代総理になる青年周恩来は来日した。日本で最初に中国人留学生を受け入れた公立の高等教育機関である東京高等師範学校と第一高等学校（現・東京大学）への入学を目指すためだった。東亜高等予備学校に入り日本語を学んだ。この予備校を選んだのは、校長の松本亀次郎（1866～1945年）が1908年から12年まで北京の京師法政学堂（後に北京大学に編入）で外国人教師（日本語）を務め、中国人からの信頼と評価が高かったからだ。松本は帰国後に私財と寄付により東亜高等予備学校を設立。35年間にわたり中国人留学生の教育に尽力した。



「東京高等師範学校一覧」

また松本はこれより前の03年、東京高等師範学校の学校長だった嘉納治五郎の薦めにより、清朝末期の中国人留学生の受け入れ先として知られた宏文学院で教授を務め、中国人留学生向けに18種類の日本語教材を執筆した。それを手にして学んだ中国人留学生は数え切れず、魯迅や秋瑾、李大釗、周恩来も名を連ねていた。

当時、日本留学ブームに沸いていた中国の主要都市でも、松本亀次郎の教材の代理販売が行われていた。その一つが、1901年に天津・租界の旭街49号（現在の和平区和平路と鞍山道の交差点）に開設された日本の商社「加藤洋行」だ。加藤洋行は南開中学の近くにあり、日本への留学を決意した周恩来は、ここを訪れ関連する教材を読んだことだろう。

周恩来が東亜高等予備学校を選んだもう一つの理由は、同校の卒業生の多くが東京高等師範学校に進学していたからだ。東京高等師範学校は、学費や生活費、服装費などもすべて学校から提供されていたので、中国人留学生たちにとっては人気校だった。当時、中国と日本の間にあった協定により、指定された日本の高等教育機関に合格した中国人留学生は、学業を終えて中国に帰国するまで公費留学生の待遇を受けることができた。これも周恩来がこの2校を狙った理由の一つでもある。

筆者が手にしているのは周恩来ら当時の中国人留学生の多くが使ったという日本語教材

1日13時間を超す猛勉強

周恩来の日本での生活に関する資料で、最も正確で重要なのは、かつて南開大学に収蔵され、後に中国の中央文献研究室が編集した『周恩来早期文集』（1998年2月発行）に収録されてい

る日本滞在日記だ。この日記の日本語版『周恩来「十九歳の東京日記」』が、1999年10月に小学館から出版されている。

この日記では、「学習」がまさしく主役だ。これは、以下の統計データから見て取れる。1918年1月4日から8月7日までの間だけで、日記で「東亜高等予備学校」について40回以上、「個人指導」は30回近く、さらに「東京高等師範学校」が15回、「勉強」も11回言及している。また3月11日の日記には、毎日学習13・5時間、休憩その他3・5時間、睡眠7時間というスケジュールが記されている。このようにして、周恩来は寝食を忘れて勉強に打ち込み、来る日も来る日も学校と宿舎の間を往復した。異国からの受験生として、19歳の周恩来は大きな進学のプレッシャーを感じていたと思える。

日記には、ストレス解消のために日比谷公園を散歩したり、上野で花見をしたりした記録もある。浅草に6回ほど映画を観に行き、早稲田大学の中国人留学生を何度も訪問し、書店で『新青年』など日本の雑誌や書籍を立ち読みした。また、たまに華僑が経営する中華料理店「漢陽楼」（現・千代田区神田小川町）に行き、安くておいしい焼豆腐（豆腐のうま煮）や清燉獅子頭（大きな肉団子の澄ましスープ蒸し）を注文しては古里の料理で食欲を満たした。周恩来は当時、二つの明確な短期目標をもっていた。それは、東京高等師範学校か第一高等学校の公費留学生試験に合格し、新しい知識を探究することだった。

日本語教材と研修旅行

周恩来の日本滞在中の学校の記録は、関東大震災で灰になってしまい、探すのは難しいが、当時彼が使っていた教材はおおよそ調査することができる。これらの教科書は、当時の日本語教育の第一人者であった松本亀次郎が主に編集・発行したもので、他の語学学校でも使用されていた。周恩来は留学中、主に以下の数種類を使用したようだ（1～3、6、7は松本亀次郎著）。

1. 『言文対照　漢訳日本文典』中外図書局、1904年。
2. 『言文対照　漢訳日本文典』訂正第15版、国文堂書局、1905年。
3. 『漢訳師範科講義録　日本語編』1906年（内部発行）。
4. 『日本語教科書』全3巻　宏文学院編纂（松本亀次郎が主な著者）金港堂書籍、1906年。
5. 『日語日文教科書』宏文学院編纂（松本亀次郎口述）、1907年。
6. 『漢訳　日本語会話教科書』東京光栄館書店、1914年。
7. 『漢訳　日本口語文法教科書』笹川書店、1919年。

1929年の統計データによると、『言文対照　漢訳日本文典』の改訂版は、出版以来35回重版された。『漢訳　日本語会話教科書』は、初版から20回以上も増刷された。この他、日本語教育と日本の歴史・地理・文化を融合した『華訳日本語会話教典』は1940年に有隣書屋から出版されたが、今でも学ぶ価値が感じられる。

これらの教材には、何度も登場する名所旧跡に嵐山、円山公園、琵琶湖疎水、南禅寺、大覚寺、天王寺、大悲閣

千光寺、萬福寺など、それと関連する有名人として角倉了以（京都の豪商）や隠元（中国の禅僧）、高泉（隠元に従って来日した黄檗宗の僧）らが挙げられている。この他、日本の年号や古代の天皇、伝説上の渡来人・王仁が皇太子に『論語』や『千字文』を教えたことなども紹介されている。

外国語を学んだ経験のある人は、丸暗記するしかない単語と違い、文章を学ぶ際に文型や文法を覚えるだけではなく、その中に含まれる文化的な意味も吸収できると感じるだろう。周恩来がこれらの教材から学んだものが、やがて日本を理解するために行った調査旅行のよりどころに変わったのは想像に難くない。しかも、これらの現地調査から得られた知見は、日本を分析する上での参考となり、中日関係を判断する際に考えを補ってくれただろう。

「日本は美しい文化をもっている」とは

日本文化の特徴を一言でいうのは難しいが、周恩来がどう認識していたのかは大変気になる。対日観に結びつくテーマでもあるが、「日本は美しい文化をもっている」（『周恩来外交文選』中央文献出版社、１９９０年、90頁）という認識が基本だったようだ。

「美しい文化」観を明らかにするために遺稿をひもとくと、参考として気になったのが日本留学を終える際に遺した詩作「雨中嵐山」と「雨後嵐山」である。やさしい言葉遣いながら青年の気概にあふれている。

周恩来は日本を去る前の１９１９年春、京都を探訪した。桜が咲き乱れる嵐山にひかれたようだ。四季を通してもっとも美しい風景が広がる京都は現在でも外国人にはたまらない記憶の心象風景であろう。周恩来にとってはもう一つ、嵐山探訪に魅了されながら日本の歴史を再発見したことも、美しい日本観を増幅したと思われる。

それは京都を見下ろす大悲閣千光寺への参拝が大きなきっかけになった。中国史の治水王を思い出させる縁になる寺であり、江戸時代の儒者・林羅山に日本の「禹」と称えられた角倉了以が、晩年この寺を建て居住した。利水事業に献身した人々の供養のためだったという。治水の先賢・禹は周恩来の家系と無関係ではない。周恩来の母方の万家では祖父・万青選およびその子孫まで４世代にわたって水利管理を専門職としてきた。周恩来は幼い頃、万家に出入りして禹にしたしみ、中学校の作文で９回も禹を取り上げている。治水の大切さを知り、国民の生活と国土保全にかけがえのない事業の重要性を自覚していたのだと思える。

周恩来の先祖の生家のある紹興には親族が参拝してきた大禹陵がある。山腹からは繁栄した街が一望できる。大悲閣千光寺を見て、似たような景色だ、との感想をもったにちがいない。千光寺の坂の参道を上り下りしながら、周恩来の胸に去来した心情が想像できる。

京都は科学技術に敏感で、近代化のシンボル、琵琶湖疎水の開通を成功させると、一早く水力発電を整備した。「電光」がこぼれる京の街並みの夜景が眩しかったはずだ。そもそも琵琶湖疎水の案を訴えた最初の人が角倉了以だっ

たから、角倉了以の夢が後世の努力のもと現実になったのを周恩来が目にしていたのである。

周恩来は「雨後嵐山」で「十数電光」を詩に描いた。

高きに登りて遠くを望むと、
青々とした山が広がり、
多くの電光が暗い市街地を照らしている。

思えば、のちに中国の総理となった周恩来は治水と水力発電の建設に力を入れた。亡くなる直前の遺言により、黄河河口に散骨された。中国の大地を潤す水との惜別であったろう。

周恩来と美しい文化の出会いが嵐山においてもあったと思える。

百年前の日本では、嵐山大悲閣千光寺、角倉了以、林羅山らに関する知識は一般教養であり、常識としても引き継がれていた。その一部が外国人用の日本語教科書の内容になっている。周恩来が使用した、松本亀次郎が編纂した教科書にも掲載されている。このあたりは、拙著『周恩来と日本』（三和書籍）が参考になると思う。

１９１９年４月５日、周恩来が詠った「雨中嵐山」と「雨後嵐山」の二つの詩のうち、１作目の「雨中嵐山」は、日中平和友好条約を締結した１９７８年の翌年、関西の経済界を中心に亀山公園に記念詩碑が建てられた。２作目の「雨後嵐山」は国交回復半世紀の２０２２年、大悲閣千光寺の境内に有志が詩碑を建てた。亀山公園と千光寺は保津川を挟んで向かい合っている。

終わりに

嘉納治五郎と松本亀次郎、そして若き周恩来が、学ぶ途中で期せずして出会えた。その現代的意味と価値については紙面の制限により触れられずになってしまったが、「漢才」がもつ過去を未来につなげていく「磁石」作用を、再認識させてくれるのだ。

【主な参考文献】

譚璐美『帝都東京を中国革命で歩く』（白水社、２０１６年）。
安藤彦太郎『未来にかける橋―早稲田大学と中国』（成文堂選書、２００２年）。
王敏『周恩来たちの日本留学』（三和書籍、２０１５年）。
王敏『嵐山の周恩来』（三和書籍、２０１９年）。
王敏『周恩来と日本』（三和書籍、２０２２年）。
王敏『周恩来の日本生活』（三和書籍、２０２３年）。
（２０２３年５月18日・公開講演会）

筆者略歴（おう・びん）

１９７２年、大連外国語大学で日本語を学ぶ。１９７８年、四川外国語大学大学院設立準備クラスで日本学を専攻。１９８２年、宮城教育大学に留学。お茶の水女子大学で博士号を授与。現在、法政大学名誉教授、拓殖大学国際日本文化研究所客員教授、桜美林大学大学院国際学術研究科特任教授。アジア共同体文化協力機構参与、周恩来平和研究所所長。